

Title	＜翻訳＞ピーター・クラーク「近代イギリスの選挙社会学」（二）
Author(s)	クラーク, ピーター; 岡田, 新
Citation	大阪外国語大学論集. 10 p.317-p.328
Issue Date	1994-03-18
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79634
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ピーター・クラーク

「近代イギリスの選挙社会学」(二)(翻訳)

岡 田 新

五

バラでの投票行動には、この点(投票に対する強制力の行使—記者)で、幾つかの違ったヴァリエーションがあった。リバン(Ripon)では、1832年に地主の意に反するやり方で投票したローレンス(Lawrence)地主の借地人は、家から追われ、1835年の選挙では、借地人は地主に歩調をあわせた。この例をみると、地主と借地人の間に強制的な側面があったことを見逃すことはできない。⁽⁴⁵⁾1852年、ゲイツヘッド(Gateshead)では、地方の資本家が固めた票が、決定的な役割を果たした。⁽⁴⁶⁾またランカシャーの多くの工場町では、職人に選挙権が与えられたとたん、脅迫が戦術として用いられた。それはとても婉曲に表現できるものではなかった。脅迫が実は労働者の空想に過ぎず、企図されてはいなかったとしても、「にもかかわらず、労働者の抱いた恐怖は真実であった」。⁽⁴⁷⁾自由党の内務大臣ブルース(Bruce)は、こう正しく指摘している。大衆の眼から見ると、オープン・ヴォーティングが採用されていることも、本当に制裁が行われることを裏付けていた。

急進的な暴徒が物理的な力を行使し、最も威力をふるったのは、おそらく1830年代である。商店のボイコット。(大衆の主張に共鳴する商店からしか商品を購入しないこと。)これこそ、選挙権を持たない大衆が、上位のものに経済的な「影響力」を行使する方法であった。金持ちの顧客をあてにする商店主は、ウェストミンスターのお店と同じように、明らかに上から影響を受けた。しかし工業地帯のハダズフィールド(Huddersfield)では、毎週土曜日に払われる賃金からのおこぼれが、小売商の生活を支えていた。ここでは、急進派による商店のボイコットは、強力な武器であった。⁽⁴⁸⁾「土曜の夜の労働者の票。そのすさまじい力に抗うことはできない。」

従って、有権者が少数であること。これを前提にすると、オープン・ヴォーティングは、秘密投票よりも、国民をより代表する制度であったかもしれない。オープン・ヴォーティングであれば、労働者階級の非有権者は、労働者階級の有権者より、ずっと強い力で投票に干渉することができたのである。

だが影響力は、水のように上から下に流れる方が自然である。だから、秘密投票の実現と「身分に対する敬意のコミュニティ」の解体には、密接な関係があった。⁽⁴⁹⁾「レアード氏(Mr. Laird)が死ぬか、秘密投票が実現するまで、自由党はこのバラに全く希望をもてない。」⁽⁵⁰⁾ 1868年、

バーケンヘッド (Birkenhead) についての報告はこう語っている。この報告は、上の状況をよく物語っている。しかし「関心のコミュニティー」は、純粋な精神的制裁に基づいていた。このため、「関心のコミュニティー」は、秘密投票の実現による変化にも影響を被らなかった。

だからバラでの投票行動、とりわけ秘密投票が導入されてから後のバラでの投票行動を説明するためには、「関心のコミュニティー」に依拠しなければならない。1832年以後、バラをコントロールしていた影響力は、⁽⁵¹⁾カウンティーに残っていたものほど強くはなく、また永続的でもなかった。都市の政治は、多くの場合、よりオープンであった。加えて、都市の政治と農村の政治の基調には、本質的な違いがあった。都市は急進主義を主導していた。都市は、1830年代の急進的な議会改革運動の中心であった。1847年に、グレート・ウエスト・ライディング (Great West Riding) 選挙区で、無関心なウィッグを尻目に、リチャード・コブデン (Richard Cobden) を選んだのは、町の自由党員の反乱であった。多くのバラでは、地方のビジネスマンと、バラの外の地主が、優位を競っていた。⁽⁵²⁾ バーラ (Bala) では、「市」の地位を獲得する闘いの中で、メリオネス (Merioneth) の自由党が主導権を確立したのである。⁽⁵³⁾

自由党は、「都市」の政党という色彩を色濃く持っていた。政治的に都市に同調しない農村の地主に自由党は敵意を抱いていた。バンベリー (Banbury) がその一例である。ここではトーリーは、バラに外から持ち込まれる農村的な要素に依拠していた。一方、自由党は、都市の影響力を農村に輸出することに足場をおいていた。⁽⁵⁴⁾ これがバラの自由党にみられた影響力の典型的な例である。この自由党を一つにまとめていたのは、少なくともエリートのレベルでは、非国教徒であった。1830年代のブラッドフォード (Bradford) の自由党員は、非国教徒の工場主であった。またウエスト・ライディングで中産階級の挑戦を指揮したのも、リーズ (Leeds) のユニテリアンや、コングリゲーションリストやインディペンデントであった。⁽⁵⁵⁾

自由党を結局、飲酒業界と衝突させたのも、非国教徒であった。酒場の業界は、1850年代から圧力団体として、何人かの自由党議員に対抗して、(あるいは自らそうなることを選んだ議員に対して) 圧力をかけていた。酒屋が自由党に深い敵意を抱いていた、というわけではない。ブラッドフォードでは、酒場業界は1830年代から既にトーリーであった。だが例えばバンベリーでは、1837-59年でも、自由党は酒屋の票に強い力を維持していた。⁽⁵⁶⁾

しかし禁酒運動 (temperance movement) の中の絶対禁酒論者と禁酒法論者は、圧倒的に非国教徒の影響下にあった。1874年に、ユナイテッド・キングダム・アライアンス (United Kingdom Alliance) は、正式に自由党に加わった。これは自由党と禁酒運動との間の長い同盟関係を承認したものである。これはまた、禁酒運動とヴィクトリアン・リベラリズムの気質がよく似ていたことを示す証拠でもあった。反対に、酒屋の利害は、トーリーと一体のものと見なされるようになる。1871年の酒類販売免許法案をめぐる危機によって、一夜の内にそうなったわけではない。しかし両者が一体と見なされることは、必然的であり、また不可逆的でもあった。⁽⁵⁷⁾

更に1867年以後は、労働者が明らかに都市の自由主義を構成する重要な要因となった。1868年の選挙では、議会改革連盟 (Reform League) は、労働組合の票を、果敢に自由党に結集した。これがイギリス政治におけるリブ・ラブ (Lib-Lab) 時代の幕開けである。⁽⁵⁸⁾新しい有権者が、こうした従属的な役割に甘んじたことは、興味深い。

六

1872年には、秘密投票法 (The Ballot Act) が議会を通過した。古典的な形での投票の強制は、武器としては役立たなくなった。投票行動を説明する中心的な問題は、「影響力」ではなく、曖昧模糊とした政治意識の問題となった。この政治意識を理解するためには、社会学の理論に注意を向けねばならない。というのも、人間が抱く価値、人間の規範的な信条は、人間が自分の地位を比べようとする場合と同じく、社会構造によって条件づけられているからである。人間が自分の地位を比較しようとする集団 (ないし個人) は、比較準拠集団 (comparative reference group) と呼ばれる。⁽⁵⁹⁾人間が価値を導き出す集団は、規範的準拠集団 (normative reference group) という言葉で呼ぶことができよう。その人間が属している集団が、普通この規範的な準拠集団となる。規範的な準拠集団は、その集団の中で、ある規範が受けいれられていることを基礎としている。ヴィクトリア時代のイングランドでは、こうした規範的な準拠集団が、極めて重要であった。例えば、禁酒運動は、これを唱える人々の生活に決定的な影響を与える倫理を広めた。その結果、禁酒を主唱する人々には、社会的な排他性が与えられたのである。

この場合、禁酒運動にかかわった人々は、厳密な意味での集団を構成していた。この人々は自分達は同じ集団に属していると考えていた。同じように他の人々も、この人々を一つの集団とみなしていた。禁酒運動にかかわった人々は、社会的に相互に作用しあい、顔をつき合わせるコミュニティを形成していた。⁽⁶⁰⁾もちろん少なくとも潜在的には、人間は二つ以上の集団のメンバーとなりうる。⁽⁶¹⁾ある人物は、アイルランド移民であり、ローマ・カソリックであり、そして労働組合の組合員でもありうる。だがこれは必ずしも、忠誠心が衝突することを意味しない。ある集団の規範を、他の集団の規範と置き換えることができる場合もあるからである。カソリックであることは、アイルランド人であることの一部でもあった。またイングランドのカソリック教会は、大抵アイルランド人の教会でもあった。また、規範は、その人物の演じる幾つかの役割のうち、一つにしか影響を及ぼさない場合もあった。これも同じように重要である。平日の間は良き労働組合員であり、土曜の夜は良きアイルランド人であり、そして日曜の朝には、良きカソリック教徒としてふるまうこともできるのである。

特定の集団が、その人の心の中で、どれほど抜きん出た意義を持っていたか。これが重要である。トートロジーに陥る危険を承知の上で、次のように言うことができよう。どの準拠集団が、政治的なコンテキストにおいて、抜きん出た意味を持っていたか。これが政治的には重要なので

ある。そしてヴィクトリア時代のイングランドでは、普通、階級よりも宗教が、こうした突出した意義を担っていたのであった。

歴史家はこの問題について、かなり広く意見を共有しているようにみえる。もっとも、歴史家は同じ用語を使わない。このために、この事実はいくらか覆い隠されてしまっている。ムーアが「関心のコミュニティー」と呼んでいたもの。これは、上に述べた規範的機能を満たす集団であると考えることが適切であろう。こうした用語を使えば、社会構造を違った観点から捉える他の歴史家の観察とも、共通の土俵をつくることができる。こうした観点から、三つの学派による異なった解釈を検討してみよう。これは、各々（a）カール・マルクス（Karl Marx）、（b）ラルフ・ダーレンドルフ（Ralf Dahrendorf）、（c）マックス・ウェーバー（Max Weber）という別々の社会学者から導かれた解釈である。

（a） マルクス主義的なアプローチは、階級意識の現象に集中している。1830年代と1840年代の労働者階級の意識がどのようなものであったにせよ、労働者はほとんど完全に選挙制度の埒外にあった。だから、もし労働者にとって階級が政治的に抜きん出た意義を持っていたとしても、選挙に直接の影響をおよぼすことはなかった。チャーチストは投票権を持っていなかった。だからこそ、チャーチストだったのである。実際のところ、第一次議会改革こそ、労働者階級というものを定義したのだ、と論じることができる。「ぬぐい去ることのできない筆で、社会階級を残酷に線引きしたのは、選挙権資格であった」。⁽⁶²⁾

1832年に投票権を得たのは、果して中産階級だったかどうか。これが昔から問題となってきた。だが投票権を獲得した人を中産階級と定義すること。これで、古くからの問題を見事に解決することができる。中産階級を政治体制の中に包みこんだことが、中産階級を政治体制と和解させた実質的な要因であった。幾つかの同時代の証言がこれを裏付けている。1867年にダイシー（A.V.Dicey）は、この解釈をとった。ダイシーは、これを発展させ、労働者階級についてこう論じている。「労働者を階級として扱うなら、労働者は階級の感情に因われ、そのエネルギーは階級的な利益に捧げられるであろう。」⁽⁶³⁾ 選挙権を改めて規定しなおすこと。これによってのみ、階級は消し去り難い存在ではなくなるであろう、と。

しかし労働者を政治的に排斥することが、労働者の階級意識を涵養すること。このことと、議会改革が階級意識に対する安全な解決策であると考えること。これは別の事柄である。1832年の議会改革による階級の分裂と、1860年代の議会改革による階級の包容。この間に、『議会改革論集』にみたような、「存続可能な階級社会の勃興」があった。⁽⁶⁴⁾ これがどの程度労働者階級の平和的な社会化によるのか。（「成功による教育」）あるいは急進主義の無慈悲な弾圧によるのか。（「失敗による教育」）⁽⁶⁵⁾ この点には、意見の違いがあるであろう。

オルダム（Oldham）は、この変化についての、マルクス主義的な観点から見た興味深いケース・スタディとなっている。⁽⁶⁶⁾ 1820年代と1830年代、資本主義がまだ脆弱だったころ、労働者

の結束は、階級意識にはっきりと表現されていた。しかし1850年代には、労働者組織は崩壊し、大衆の政治の中心は、アイルランド人のコミュニティーに移った。これはつぎのことを強く思い起こさせる。つまり、人間の行為と価値感情は、自分達以外の集団をどのように見るかによってしばしば形成されるのである。⁽⁶⁷⁾アイルランド人は明かに、生来のイギリス人が、自分自身の存在を確認し、自分達の価値を確認するネガティブな準拠集団として機能したのであった。

資本主義が永続性をもつこと。これが明らかになったために、資本主義とは違った憎悪の対象が選ばれ、階級闘争にとって代わった。マルクス主義の階級概念を構成する二つの要素である、唯物論と意識が分裂してしまったのであった。これにかわって、下位の社会集団が、労働者が感じる社会的「不公正」を表象する媒体を提供した。この下位の社会集団こそ、「社会の内部にありながら、社会に無縁であるために保護され、自分の小さな下位文化を、それにふさわしいスケールで、建設するのを許された人々」⁽⁶⁸⁾であった。こうした下位の文化同士が、他の集団に対して、自己の存在を確認し、互いに争った。政治的な労働運動は、選挙で勝利する機会が与えられた時でも、こういう「虚偽の意識」によって、興隆を妨げられ、機会を失ってしまったのである。

(b) ヴィンセント (Vincent) 教授は、マルクス主義的なアプローチに代わる方法を提起している。「洗練された意味での階級は」、19世紀の「普通の人々の政治傾向の中で、中心的な意義をもっていた。」こう教授は言う。⁽⁶⁹⁾一見これは、驚くべき主張である。しかし、教授が階級という言葉で意味しているのは、俗に用いられている意味や、マルクス主義的な意味ではない。そうではなく、教授の言う階級とは、「政治秩序の変化を達成したり、妨げたり、また、より低い次元では、権力者を交代させるために全国レベルで活動する機能集団（教会を含む）」⁽⁷⁰⁾のことなのである。ここで教授は、ダーレンドルフの考えに依拠している。ダーレンドルフの理論は、階級概念を、より一般的な定義に拡充し、マルクスの概念をその特殊なケースとして位置づける。⁽⁷¹⁾これによってダーレンドルフは、マルクスを乗り越えようとした。マルクスにおける階級概念の経済的基礎は放棄される。ダーレンドルフの言う階級とは、本質的に、権力を争う集団のことなのである。⁽⁷²⁾

しかし、政党もまたこうした権力を争う集団であるように思われる。実のところ、ダーレンドルフの理論を適用する時、ヴィンセントもこれに気づいている。「政党と階級は良く似ている。しかしそれは同じ性質のものではない。」⁽⁷³⁾ヴィンセントはこう論じている。だがこれでは階級は、まるで政党と同じである。筆者には、これが階級についての有意義な定義であり、階級という言葉を、洗練された意味に定義し直すものである、とは考え難い。こう告白しなければならない。⁽⁷⁴⁾

しかしヴィンセント教授は、投票行動が明確な社会的基盤を持っていたことを示唆している。ここからは有意義な示唆をくみ取ることができる。教授が考えていたような一般的なレベルではなく、より具体的な次元で、財産の配分こそ投票行動において中心的な意義を持っていた、と主張することもできるであろう。⁽⁷⁵⁾だが更に、教授によれば、階級的な説明があてはまらない投

票態度も広く存在していた。しかもそれは、社会学的な説明を必要とする構造的なものであったのであった⁽⁷⁶⁾。教授にとっては、こうした階級的説明ができない投票態度に、国教会と非国教徒の争いがかかわっていたことは不幸なことであろう。結局、ロッチデールの選挙の研究で、ヴィンセント教授は、宗教の分裂が都市の政治の本質をなしていたことを認めている。⁽⁷⁷⁾だがもしロッチデールにおける規範的集団が、明らかに宗教的基盤を持っていたとすれば、この発見を捨て去ることはできないはずであろう。

(c) ヴィクトリア朝の選挙に示された政治意識の起源は、経済よりも、むしろ宗教にあった。階級のモデルをこの政治意識の説明に適用することは難しい。マルクス主義の階級は、資本主義的な搾取という恒常的な要因によって規定されるばかりでなく、階級意識という経過的な現象によっても規定されている。これに対してダーレンドルフの階級概念は、意識の要素だけで定義されている。他方、ウエーバーは、階級をはっきりと経済条件によって規定し、意識を必要条件としていない。ウエーバーでは、階級的な行為、ないし階級闘争の問題は、変数として残されている。こうした階級についての定義の違いは、おそらく次のように要約することができるであろう。マルクスによれば、階級は、あたかも（不思議の国のアリスの一記者）チェシャー・キャットのように、現れたり現れなかったりする存在である。ダーレンドルフによれば、闘争あるところには、階級がある。一方ウエーバーによれば、貧者は恒に存在するけれども、それは時折階級意識を帯びるに過ぎない。ウエーバーの政治社会学は、階級概念をこのように用いているのである。⁽⁷⁸⁾

しかしウエーバーは、身分にも同じように重要な意義を認めている。階級とは対照的に、身分は、必然的に意識の問題である。というのも、身分は信条に依拠しているからである。身分集団は、共通の価値によって保持されたコミュニティとして定義される。身分集団は、そのメンバーに対して、規範的準拠集団としての機能を果たす。階級による政治は、主として物質的な利害にかかわる政治である。身分の政治、あるいはアメリカの用語で言えば、「文化的な政治」⁽⁸⁰⁾はそうではない。これは、社会において支配的なイデオロギーの影響によって規定される。ヴィクトリア時代のイングランドでは、ライフ・スタイルの衝突は、明らかに宗教的ないし疑似宗教的な違いによって、特徴づけられていた。世俗化の進行を示す証拠にもかかわらず、階級よりも、むしろ宗教的、疑似宗教的な違いこそ、政治意識を形作っていたのである。

七

こうした分析から、三つの大きな問題が導かれる。

- 一、宗教は、選挙における影響力として、どれほど重要であったのか。その重要性はいつ減退したのか。

二、選挙は、いつ「階級闘争の民主主義的な表現」となったのか。

三、選挙は、いつ地方的なものから全国的なものに変貌したのか。

第一の点については、宗教が政治に根本的な形でかかわっていた、という仮説に異を唱える人はほとんどいない。もっとも証拠をあげるのは難しい。ポール・ブックでも、これを明確にすることは難しい。しかし保守党と国教会、自由党と非国教徒が一体のものであったことは周知の事実であった。⁽⁸¹⁾ ヴィンセント教授は言う。「中心部には欠けたところがある。しかしおびただしい19世紀の非国教会のチャペルこそ、かなりはっきりとこの史料の穴を埋めるものの一つであろう。」⁽⁸²⁾ 1860年代までに、非国教徒の自由党への関与は、相当堅固なものとなった。1874年の選挙では、いくらか動揺があった。だが1880年には、禁酒運動家であろうと、リベルタンであろうと、非国教徒は、自由党へと復帰した。そしてそれからは決して自由党から離れなかった。1880年代までには、自由党は、ウエズリー派も支配下に置いた。ウエズリー派は、もともとトーリーと関係があったから、この点は更なる説明が必要であろう。⁽⁸³⁾ 1863年と1874年の選挙では、宗教問題が大きな比重を占めた。1880年には、宗教はさほど重要ではなくなった、と言われている。だがその時ですら、国教会と非国教徒は、驚くべき規模で、投票に動員されたのである。⁽⁸⁴⁾

事実、1867年の議会改革の前と後の双方の時期について、投票行動における宗教の重要性を証明する統計的な証拠がある。もっとも宗教は、非国教徒ないし国教徒が、特に強力な地域においてだけ、他の要因を凌駕した。⁽⁸⁵⁾ しかしいずれかの宗派が、強力な地位にあった地域は少なかつた。だからこれは例外というより、むしろ通則だったのである。非国教徒の牙城ウエルズでは、宗教と政治は明らかに一体だった。だがイングランドのほとんどの都市地域でも、宗教と政治の関係は同じように密接だった。⁽⁸⁶⁾ 1870年前後のリーズでは、保守党と国教徒との間に、驚くほど強い相関関係があった。⁽⁸⁷⁾ ランカシャーでも、この時期同じような状況があった。「ランカシャーでは、国教徒は皆保守党で、非国教徒は自由党だという原則が受け入れられている。これは好ましくない。」マンチェスターの自由主義的な司教は、悲しげにこう語っている。⁽⁸⁸⁾ 例えばグロスアップ (Glossop) では、紡績工場の工場主は極めて宗派的で、これが町の政治の基礎となっていた。全体として、イングランドの農村では、(国教会の設置する一訳者) 私設学校へ通う児童の数の比率と、1886年、1895年の保守党の票との間には強い相関がみられたのである。⁽⁹⁰⁾

これは、工場地域における保守党の強さの源泉とも密接な関係がある。長期的にみると、1867年以後、保守党の党勢は上向いて行った。この保守党の党勢の改善は、もっぱらロンドンとランカシャーでの選挙の劇的な変動の結果である。⁽⁹¹⁾ ロンドンにおける保守党へのシフトは、後で見るような経済的原因によるものであったかもしれない。しかし1868年と1874年に、トーリーがランカシャーで獲得した地歩は、これとは別である。新しく有権者になった人の数は、北西部で最も多かった。⁽⁹²⁾ だから、この保守党の前進を、有権者の中における労働者の支持の増大に帰することは、ごく自然である。マンチェスター学派に対する民主的なトーリーの反撃、というわけである。しかし選挙区の境界の変更、選挙権の拡大と得票移動の相関についての詳細な研究に

よれば、保守党が選挙権の拡大によって利益を得たことを証明する証拠は、ほとんど見あたらない。⁽⁹³⁾保守党が前進を享受したのは、既に強い支持を受けていた議席であった。この点では、保守党の強さは、本質的には、明らかにプロテスタンティズムの一体感への非階級的なアピールにもとづくものであった。というのも、ランカシャーの国教会は、急速に福音主義的になっていったからである。これを今日の北アイルランドの状況と比べることは避け難いであろう。ブランド（Brand）はグラッドストーンにこう告白している。「ランカシャーは全く狂気にとりつかれている。ここでは選挙は、人種の間の闘争、サクソン対ケルトの闘争になってしまっているのだ。」⁽⁹⁴⁾

八

階級的な政治と結びついた経済問題。その中心は富の分配の問題である。だがこの問題が表面化するまでには長い時間がかかった。1880年には経済不況が、ディズレイリの帝国主義（ビーコンスフィードリズム）を引きずり下ろした、と論じられてきた。⁽⁹⁵⁾しかしこの選挙の結果、社会を二分するような問題は何も起こらなかった。1868年から1880年代には、自由党も保守党も、社会立法の分野で大きな前進を遂げた。にもかかわらず、「福祉」は決して選挙の主要なテーマにはならなかった。⁽⁹⁶⁾このことは興味深い。新しい有権者、つまり1867年に選挙権を獲得した人々は、功利主義が投票の動機について組み立ててきた仮説を常に裏切ってきたのである。しかし古い有権者も、決して階級の影響を意識しなかったわけではない。ジェームズ・コンフォード（James Conford）教授は、重要な論稿で、1868年以後、「階級は、政治的な党派を決定する最も重要な単一の要因となった」と論じている。⁽⁹⁷⁾教授が例としてあげているのは、保守党が次第に中産階級の議席を獲得していったロンドンである。1868年ミドルセックスにおけるジョージ・ハミルトン（Lord George Hamiton）の勝利が、その一里塚だった。教授によれば、「専門職、商売人、事務職が、ロンドンの郊外にあふれだし、選挙区の基調とその政治を次第に変貌させていった。」⁽⁹⁸⁾1880年でも、イングランドのホーム・カントリーのトーリー支持は揺るがなかった。⁽⁹⁹⁾1885年の議席再配分法が、これに完全な政治的重要性を与えた。この法律は、都市を分割し、保守党が都市の郊外の一人区で議席を獲得できるようにしたのであった。

こうした発展は、アイルランド自治問題以前に起こっている。アイルランド自治問題による1886年の議会レベルでの自由党の分裂。この分裂は、実際には、選挙区のレベルにおける極めて明瞭な継続性を覆い隠しているように思われる。ノーサンプトンシャーでは、自由党は、1885年までに、ジェントリーのかかなり重要な部分の支持を失っていた。その結果、一方では、牧師と地主と農業者の同盟が（保守党の）プリムローズ・リーグを通じて活動し、他方、非国教徒の町のビジネスマンが農業労働者を政治化しようとして自由党に尽力する。⁽¹⁰⁰⁾こういう光景がみられるようになっていた。この点、都市のエリート自由主義は、1890年代まで残っていた。ヴィクトリア中期には、ビジネスの票は、全体として自由党支持であった。⁽¹⁰¹⁾一般的にこう言っても、

かなり確実であろう。1868年以後、大きな町では、ビジネス票は次第に保守党へと傾いていった。その他の所では、もっと長い間、ビジネス票は、自由党の主流をなしていた。もちろん議会の自由党は、かなり多数のビジネスマンを抱えていた。しかしこれは自由党が彼らの階級を代表していたことを意味しているわけではない。ビジネス票が、20世紀初頭に自由党を助けたかどうかは全体として疑わしい。自由貿易に強いセクショナルな利益をもつ産業（綿業）でも、ビジネスマンは、アスキス政府の下で、保守党に鋭く傾いていったのであった。⁽¹⁰²⁾

カウンティーの外部有権者。つまりカウンティーで別にもう一票行使する権利を持っていたバラのフリーホルダー。このカウンティー外部の有権者に対して各政党が示した態度ほど、ビジネス票に対する政党の態度の変化を示すものはない。ここにはアイロニーが見られる。当初ウィッグは、外部の有権者を、カウンティーから完全に締め出そうとこころみた。しかしこのカウンティーの外部の有権者が、結局、ウィッグの最も堅い支持者となったのである。1859年の保守党の議会改革法案は、カウンティーの外部の有権者をバラで投票させようとした。だがジョン・ブライトのような自由党員は、カウンティーの外部の有権者の権利を暖かく擁護した。⁽¹⁰³⁾保守党法案は、その後、この問題をめぐって座礁したのであった。第三次議会改革の頃には、ウィッグだけが、明かにカウンティーの外部の有権者を心から支持するチャンピオンになっていた。急進派はこれを激しく攻撃し、外部有権者がもつカウンティーでの利益をねたむ保守党も、この攻撃に加わった。⁽¹⁰⁴⁾従ってこの頃までには、自由党の大部分は複数投票に敵意を抱くようになっていた。1886年以後、複数投票は、明かに統一党を支持するようになっていった。自由統一派が複数投票者の間で不均衡に強い支持を得ていた、という推測はおそらく正しい。1910年には、カウンティーの外部の有権者は圧倒的に保守党であった。この推測に異を唱える人はいない。その支持が2対1を上回るものか、下回るものかについては議論の余地がある。⁽¹⁰⁵⁾

これらのことは全て、比較的富裕な部分がトーリーに傾いていったことを示している。1868年以後には、この傾向はようやくそれと分る程度であった。だが1886年以後、これははっきりし始め、1906年以後には、くっきりと明瞭なものとなった。統一党は1886年から1906年まで選挙で善戦し続けた。その理由は、より中産階級的な保守主義が、伝統的なトーリーの影響力を補うようになったからである。一方トーリーは、十分優位を保てるだけの労働者階級の支持を保ち続けた。しかしトーリーは労働者には、信頼をおけなくなっていた。というのも、より明確に労働者階級にアピールする党が出現すれば、トーリーの労働者へのアピールは弱いものとなるはずだったからである。驚くべきことに、1890年代には、社会改革の問題は、政党の綱領では全く言及されていない。しかし大衆的な有権者のために社会改革は必要だと感じられるようになっていった。対立する方向に宗教をひきずろうとすることは、重要性を失っていった。労働者としての意識が高まり、労働者としていかに投票すべきか、というより明確な見方を労働者がとるようになり始めたのである。けれども、これは必然的に「ブルジョア」的な自由党の地位を揺るがした、というわけではなかった。

マルクス主義は、労働組合主義的な意識と社会主義的な意識を区別している。この区別に注目することは有益であろう。労働組合主義的な意識とは、自然発生的で、既存の社会における労働者の直接的な利益にかかわる。一方、社会主義的な意識は、革命党によって注入され、異なった社会を要求する意識である。⁽¹⁰⁶⁾問題はここにある。つまり、社会改革的な政治と、労働者の労働組合意識とは決して矛盾するものではない。原理的にみれば、社会改革的な自由党は、労働組合主義的意識のような労働者階級の意識を、完全に反映することができるのである。では、実際にはどうだったのであろうか？

(未完)

【原注】

- (45) Gash, *Politics in the Age of Peel*, p.221.
- (46) Norman McCord, 'Gateshead politics in the Age of Reform', *Northern History*, iv (1969), p.178.
- (47) Hanham, *Elections and Party Management*, pp.82-5; cf. O'Leary, *Elimination of Corrupt Practices*, pp.60-1.
- (48) Gash, *Politics in the Age of Peel*, pp.137-8, 145-6; J.R.Vincent, *Pollbooks; How Victorian Voted*. (Cambridge, 1967), pp.15-16.; *idem.*, *The Formation of the Liberal Party, 1857-1868*, pp.100-4.
- (49) この関係は、違うニュアンスをもってであるが、Moore, 'Concession or cure', pp.55-6.; 'Social Structure and public opinion', pp.44-5.56-7; 'Political Morality', p.34.でも指摘されている。
- (50) Harrison, *Before the Socialists*, pp.156-7 に引用。Laird の造船が町の大きな雇用者であった。
- (51) E.g. Gateshead. McCord, 'Gateshead politics' pp.181-2.
- (52) これらの例については Gash, *Politics in the Age of Peel*, p.306.; Thompson, 'Whigs and Liberals' p.231; Hanham, *Election and Party Management*, pp.55-6.
- (53) Jones, 'Merioneth politics', pp.292-60. Peter Jones の教授就任講義 *The Dynamics of Politics in mid-nineteenth-century Wales* (Cardiff, 1971) を、更に引用したかったが、本稿には遅すぎた。
- (54) Brian Harrison and Barrie Trinder, *Drink and Sobriety in an early Victorian country town Banbury 1830-1860* (E.H.R.Supplement 4, 1969), p.32.; cf.Vincent, *Pollbooks*, pp.14-15.
- (55) Wright, 'A Radical borough', pp.134-5; Thompson, 'Whigs and Liberals', p.233.
- (56) Vincent, *Pollbooks*, pp.17-18; Wright, *loc.cit.*, pp.160, 162.; Harrison and Trinder, *op.cit.*, pp.4-5.
- (57) Brian Harrison, *Drink and Victorians. The temperance question in England 1815-1872*. (1971)pp.162-6, 225-6, 242-4, 265-7, 272-3, 283-5, 291 ff. 342-3, 382-3.の決定的な研究をみよ。
- (58) Harrison, *Before the Socialists*, p.209; cf. 議会改革連盟のエージェントの報告によるバラの調査については pp.154-68 を見よ。
- (59) もしこの比較が好ましいものでなければ、グループに相対的な損失の感情が発生する。しかし相対的な損失は、比較準拠集団の理論の中で、ここで私が強調したい点ではない。一般的な議論については、Robert K.Merton, *Social Theory and Social Structure* (1968), pp.279-440;特に W.G.Runciman, *Relative Deprivation and Social Justice* (1966), pp.12-15. 筆者はここでこの三分法に従っている。
- (60) Merton, *op.cit.*, pp.339-40 参照。三番目の基準を満たさないこれら集合は、厳密に言えば集団 (group) ではない。この分析に本質的なものは集団ではなく集合だと論じることでもできよう。

- (61) このような潜在的なメンバーを記述する場合に疑似集団という用語が使われる。
- (62) E.P.Thompson, *The Making of the English Working Class* (1968), p.903.
- (63) *Essays in Reform*, p.82.
- (64) Harold Perkin, *The Origins of Modern English Society 1780-1880* (1969), p.316.Perkin はもちろんマルクス主義者ではない。しかし彼はマルクスの階級概念に基礎をおいている。pp.176, 209, 218-19, 271.参照。
- (65) See *ibid.*, ch.9.
- (66) John Foster, 'Nineteenth Century town-a class dimension' in H.J.Dyos(ed.), *The Study of Urban History*(1968), pp.281-99.
- (67) Merton, *Social Theory and Social Stricture*, p.361.
- (68) Foster, 'A class dimension', p.283.
- (69) Vincent, *Pollbooks*, p.30.
- (70) *Ibid.*, pp.28-9.
- (71) Ralf Darlendorf, *Class and Class Conflict in Industrial Society*(1959) pp.136-7, 245.
- (72) こうして「階級は、あらゆる協調的な社会の内部で、その権威の行使に加わったりそれから排除されるような社会的な闘争集団である。」*ibid.*, p.138.
- (73) Vincent, *Pollbooks*, p.31.
- (74) R.S.Neal は Dahrendorf 理論を違った形で適用しているが、これも困難を解決しない。Neal は Vincent が階級をまだ経済的社会的な階層として考えていることを批判し、権威との関係からのみ規定されるような純粋な階級の概念を構築している。('Class and class consciousness in early nineteenth-century England: three classes or five?' *Victorian Studies*, xii (1968-9, p.32, n.47) こうした理解に従えば、階級的な意識をうみだす疑似集団は、政治的な階級であることになる。これは「継続的な政治的経済的な行動の存在によって、たやすく形成される」(*ibid.*, pp.9-10) しかし選挙の研究においては、政治行動こそ我々が説明しようとするものである。階級の定義の中に、このような本質的な要素を組み入れてしまえば、トートロジーの輪の中に完璧に囚われてしまうことになるであろう。
- (75) Vincent, *Pollbooks*, p.25.
- (76) *Ibid.*, p.14 こうした扱い方の弱点は、Vincent が階級についての一つの理論から出発して、階級を見出そうとしている事実から派生するものと思われる。教授は、結論を要約する時、「社会学的に興味深い動機が明確に現われてこなかった」選挙区を排除している。これは、明かに「選挙は・・・階級関係というレベルで議論することができる」ということに疑問の余地を残す。なぜ階級だけが社会学的に興味深いものなのであろうか？
- (77) Vincent, *The Formation of the Liberal Party*, p.106.
- (78) Clarke, *Lancashire and the New Liberalism*, pp.15-18. ウェーバーの思想についての最も優れたアプローチは、Richard Bendix, *Max Weber, an Intellectual portrait*(1960)と Raymond Aron, *Main Currents in Sociological Thought*, Vol.2 (1968),とりわけ pp.179-252. また 'Note on concepts and terminology' in J.H.Goldthorpe and David Lockwood, 'Affluence and the British class structure', *Sociological Review*, xi(1963), pp.157-9. こうした思想についての最も直截な入門は、Peter Worsey の編になる Open University のテキスト、*Introducing Sociology*(Penguin, 1970), pp.283-366 の Roy Fitzhenry の論稿である。
- (79) おそらくこれは身分の政治よりは優れた用語であろう。身分の政治という言葉の響きは、不幸である。Ricard Hofstadter, *The Paranoid Style in American Politics*(1966), p.86.を参照。
- (80) Gash のコメント「宗教それ自体が政治の一種であった」を参照。*Politics in the Age of Peel*, p.175.ピーライトの選挙マネージャーであった Bonham は、1847 年の選挙の結果についてこう言っている。「Maynooth は我らの友の確実に何人か落選させた。自由貿易は全くそうではない。」*ibid.*, p.318.n. その20年後、Banbury での自由党の選挙運動家は、まだ Maynooth にしか関心のない有権者と出会ってい

- る。(Harrison and Trinder, *Drink and Society*, p.36)
- (81) 1960年代における Carmarthen の塗装工の言葉を参照。「もし非国教徒なら自由党、もし国教徒なら保守党。俺の父は国教徒だ。」David Butler and Donald Stokes, *Political Change in Britain*(1969), p.132n.
- (82) Vincent, *The Formation of the Liberal Party*, p.xviii.
- (83) *Ibid.*, pp.xvi-xviii, xxi-xxiii, 66-8.Hanham, *Elections and Party Management*, pp.122, 205. Trevor Lloyd, *The General Election of 1880*(Oxford, 1986), pp.144-5.
- (84) Lloyd, *op.cit.*, pp.3-4, 91, 121-2.
- (85) これは T.J.Nossiter, 'Aspects of electoral behaviour in English consituensies, 1832-1868', in E.Allardt and S.Rokkan(eds.), *Mass Polics*(New York, 1970), p.180. および 'Voting behaviour 1832-1872', *Political Studies*, xviii (1970) における相関関係の計量的な計測の興味深い試みから導かれた結論である。
- (86) Jones, 'Merioneth politics', pp.288-92, 315-19.参照。
- (87) Nossiter, 'Aspects of electoral behaviour', p.178.
- (88) Clarke, *Lancashire and the New Liberalism*, ch.3.参照。
- (89) A.H.Birch, *Small Town Politics* (Oxford, 1959) の興味深い章 Harold Perkin, 'The development of modern Glossip', 特に, pp.18-28 を参照。
- (90) Frank Bealey and Henry Pelling, *Labour and Politics 1900-1906*(1958), pp.4-5参照。
- (91) Robert Blake, *The Conservative Party from Peel to Churchill*(1970), p.112. の表を参照。
- (92) Seymour, *Electoral Reform*, pp.283, 291, 293.
- (93) John Vincent, 'The effect of the Second Reform Act in Lancashire', *Hist Jnl.*, xi(1968), pp.84-94.
- (94) Hanham, *Election and Party Management*, p.295.; 13章 'A Lancashire election :1868', pp.284-322. 初期のトーリーは、もっと曖昧であった。1859年にはトーリーは少なくとも二つのランカシャーの議席でローマカソリックとの了解によって利益を受けていた。K.Hoppen, 'Tories, Cathlics, and the general Election of 1859', *Hist. Jnl.*, xiii(1970),pp.56-7.

(1993. 9. 14 受理)